雨森芳洲著『交隣提醒』について——その1

呉　　満

On The "KŌRINTEISEI" (交隣提醒) by AMENOMORI Hōshū

1．はじめに
2．著者雨森芳洲について
3．解題『交隣提醒』

1．はじめに

日本と朝鮮は、太古の昔から海峡を隔てた一衣帯水の関係であり、有史以来、人と物が織りなす唇歯の関係であった。唇歯の関係とは、互いに利害関係を維持しながら相互補完の関係にあるが、一方に損害が生じれば必ず他方に害が及ぶ関係でもある。

しかし悲しいかな、両国は東北アジアの政治力学の渦中で、時には力の均衡を崩し、ほぼ二千年に亘る友好関係を維持しながらも、日本と朝鮮は中国の華（中心）と夷（周辺）関係を余儀なくされた。こうして朝鮮は永く両国の狭間で陸の要塞の役割を果たさざるを得なかった。

時代は下って豊臣秀吉による朝鮮侵略は、朝鮮を足掛かりにした明国への膨張覇権主義のなせる侵略戦争であったが、その後、政権を握った徳川家康は善隣友好の外交政策を掲げ朝鮮との善隣修復に努めた。このことは江戸時代に12回に亘るいわゆる「朝鮮通信使」の往来が物語る。

その時に江戸から対馬藩に仕え、対朝鮮外交に努めた対馬藩儒雨森芳洲（あめのもりほうしゅう）（1668～1775）がいた。雨森芳洲は、江戸中期の儒学者として、また対馬藩における対朝鮮の外交官、朝鮮語研究者、教育者として、当時としては稀有な国際感覚を具えた人物であったが、近世以降長く日本の歴史の中で脚光を浴びることなく忘れ去られた人物でもあった。ところが1990年5月、韓国の盧泰愚（ノテウ）大

統領が国賓として訪日した折、宮中晩餐会での挨拶の中で、「……270年前、朝鮮との外交に携わった雨森芳洲は、“誠意と信義の交際”を信条としたと伝えられています。彼の相手役であった朝鮮の玄徳潤（ヒョントギュン）は、東莱に誠信堂を建て日本の使節をもてなしました。今後我々の両国関係もこのような相互尊重と理解の上に、共同の理想と価値を目指して発展するでありましょう。……」と述べ、雨森芳洲について言及することによって、芳州は一躍、日韓両国で脚光を浴びることになった。韓国はもとより日本でも一部の関係者を除いて全くと言っていいほど知られていなかった人物であった。

本稿で扱う『交隣提醒（こうりんていせい）』は、1728年（享保13）、雨森芳洲が61歳の時に氏の長年に亘る対朝鮮外交の体験を踏まえ、当時の対馬藩主宗義誠（そうよしのぶ）に献じた朝鮮外交の心得書で、格調高い内容を有する芳洲の代表著作の一つである。

本書の内容についての詳細は後述するとして、本書（韓国国史編纂委員会所蔵本の『交隣提醒』）の完全な現代日本語訳は本稿が嚆矢であることを記しておく。

２．著者雨森芳洲について

「雨森芳洲関係資料調査報告書」（滋賀県教育委員会編集、平成六年刊）によれば、芳洲は寛文８（1668）年５月17日に生まれた。生誕地については、京都とする説がある。事実、江戸時代の書物では、芳洲を「京師の人」とか「平安の人」と記している。特に江戸後期の『先哲叢談』（1816）では、芳洲のことを「平安の人、或いは伊勢の人と曰う」とある。おそらく、この記述が『大日本人名辞書』（1883）における「平安の人、或いは曰う、伊勢の人」の根拠になったと思われる。

一方、芳洲と同門の新井白石は『停雲集』の中で芳洲を紹介して、「雨森東、字伯陽、京師の人、其姓橘、号芳洲、（中略）風神秀朗、才弁該博、先生称為後進領袖」と称している。

また、1709（宝永６）年４月６日付で芳洲が五島兵衛に送った書簡に「祖父、祖母、伯父、叔父、両親の墓所が京都の小河通本誓寺上ル町の報恩寺という寺

にあり、一族ことごとく血縁が絶えて、供養するのは自分一人になった」との内容をしたためている。この書簡から判断する限りでは、芳洲が幼少期に祖父母や両親と共に京都に移って来たのか、それとも京都に生まれたのかは明らかではない。

ところが、対馬の中川楽郊が安政6年（1860）に著した聞書集『楽郊紀聞』の中に、「雨森先生は、近江国の生れ也。幼して父に後れ、母に育らる。頗る母徳あり。幼少の時より学問を勧め、木下先生には一里許りの道程を、母儀五ツ時比に伴ひ往き、七ツ時過に迎ひに参られけるよし。（中略）天保十三壬寅十月五日、永留藤左衛門、雨森家に伝ふる話也とぞ。（以下、略）」と伝わるとのことである。

芳洲の生家跡とされる現「東アジア交流ハウス・雨森芳洲庵」館長の平井茂彦氏に、2004年秋、筆者が現地を訪ね確認したところに依れば、本籍地の近江国伊香郡雨森に生れ8歳にして故郷を離れ、再び故郷に戻ることはなかった、と伝えられるという。

先の『雨森芳洲関係資料調査報告書』によれば、「雨森氏は湖北の名族で、家系図に依ると和田をも称し、いずれも橘姓に出で、先祖は戦国時代浅井家に仕えたが、主家没落とともに家運が傾いた。祖父嘉兵衛清房は常陸国笠間の井上河内守正利に禄四百石で抱えられた。父清納ははじめ源左衛門清之のち加兵衛清納樑と改名、帰郷し、余呉中之郷に住んだ。後、京都に出て妹の婿の井筒屋田中五郎兵衛宅に寓し、柳軒と号し、医を業とした。貞享元年（1684）没した。弟の柳仙、つまり芳洲の叔父も医者となり彦根に住した。芳洲、名は俊良、のち藩主義誠の一字を賜り誠清と名乗った。字は伯陽、通称、東五郎、東とのみも称した。芳洲のほか、橘窓・尚絅堂・樑斎・聚家軒などの別号がある。芳洲の号は橘姓に由来、橘窓も同様である。尚絅の堂号は『中庸』を出典とするゆえ、その奉ずる儒学思想に基づくことは明らかである。これに対し、樑斎・聚家軒はそれとは対蹠的な老荘思想への共感に由来しよう。自ら選んだ号のみに絞っても既にそこに芳洲その人が濃く映し出されている思いがする」と述べられている。

晩年、齢80を越して長寿院の筋向いの「余間家」という隠居所で過ごしつつ、

和歌の研究をはじめ『古今和歌集』千篇読みと和歌一万首詠草を志したり、『万葉集』の研究にも励んだという。芳洲著の『芳洲詠草』16巻には、「やつれても　一本松の　常盤にて　今もかわらぬ　志賀のふる里」の和歌が残されている。芳洲が現在の滋賀県伊香郡、即ち湖北、近江の国出身であることは揺るぎないであろう。

1924年（大正13）、芳洲は従四位に追贈され、1980年（昭和55）10月、厳原町長寿院において芳洲225年祭が挙行され、1984年（昭和59）には高月町に「雨森芳洲庵」が開館され、今日の「高月町東アジア交流ハウス雨森芳洲庵」に引き継がれている。

1748年（寛延元）81歳にて隠居し、1755年（宝暦５）正月、対馬島日吉の別荘にて一期88歳にて死去し、当地の長寿院に埋葬される。

３．解題『交隣提醒』

本稿で扱う『交隣提醒』は、1728年（享保13）、雨森芳洲が61歳の時に対馬藩主宗義誠に献じた朝鮮外交の心得書で、格調高い内容を有する芳洲の代表著作の一つであることは既に言及した。現在、高月町立観音の里歴史民俗資料館に保管されている芳洲会所有の『交隣提醒』はあまたの雨森芳洲関係資料の中、重要文化財に指定されている

ところで、芳洲は1685年（貞享２）頃、江戸に出て儒学者木下順庵の雉塾に入門、1689年（元禄２）、22歳の時、師の勧めで対馬藩に仕え記室（記録、書記をつかさどる官吏）となり、1689年（元禄11）に朝鮮御用支配役の佐役（補佐役）となった。1702年（元禄15）２月には朝鮮に派遣される参判使の都船主（副使格）として初めて渡海、釜山倭館に赴き、翌年（1703）９月、学問稽古、即ち朝鮮語の本格的な研究のため釜山の倭館に滞在しつつ、日本人による最初の朝鮮語学習書として著名な『交隣須知』を著した。翌年（1704年）11月、朝鮮留学より帰国、その翌年（1705）４月から11月まで再度、学問稽古のため釜山に渡海している。1711年（正徳元）５月、朝鮮通信使聘礼の改革を伝えるため朝鮮に派遣され、同年８月には、来日した「第８次朝鮮通信使」の真文役即

ち、外交交渉と文書作成をつかさどる官吏として江戸に同行、1713年２月には参判使都船主として釜山に赴き同年７月に帰国している。1719年７月、芳洲52歳の時、第９次朝鮮通信使が来日の折、真文役として再び江戸に同行し、同通信使製述官の申維翰（シン・ユ・ハン）と交流、翌年の1720年10月には朝鮮国王即位の慶賀参判使都船主として釜山に渡海したが、翌年の1721年７月、朝鮮方佐役を辞任した。のち、1724年10月、芳洲57歳の時、対馬藩主の御用人を仰せ付けられたが、２年後の８月、御用人を免じられ、裁判役、即ち現在の渉外委員のような立場に就く。

この頃、1725月５月には新井白石（あらいはくせき）が69歳で死去、翌年には荻生徂徠（おぎゅうそらい）が63歳で死去、対馬藩儒の松浦霞沼（まつうらかしょう）が52歳で死去するなど、芳洲にとっては人生そのものを深く考えさせられる時期であった。そんな折、1728（享保13）年、芳洲61歳にして自身の長年の対朝鮮外交に携わった体験を、対朝鮮との友好と親善を期して『交隣提醒』を記録したものと察せられる。

翌年の1729年（享保14）３月、62歳の雨森芳洲は公作米年限交渉の裁判役として釜山に派遣され、翌年10月にその任務を終え対馬に帰国している。これが最後の渡海であった。

現在、伝えられている『交隣提醒』には５種の異本（①滋賀県高月町の「雨森芳洲文庫所蔵本」②「東京大学史料編纂所所蔵本」③対馬の旧厳原町の「中央公民館所蔵本」④韓国の「韓国国史編纂委員会所蔵本」⑤「韓国国立中央博物館所蔵本」）が伝わる。

次に、まず、現在「高月町立観音の里歴史民俗資料館所蔵」で「芳洲会」所有にして、重要文化財に指定されている「雨森芳洲文庫所蔵本」の『交隣提醒』について考察しよう。

本書の体裁は、25.7㎝×19.5㎝で、76張紙の楮紙（こうぞし）、袋綴冊子装、堅張、紙綴四針眼で原表紙は茶地。外題、内題とも“交隣提醒”とある。奥書には、“享保十三年戊申年十二月二十日、雨森東五郎”と記され、原装見返しに“雨森顕允と鵬海が並書され直筆”とある。因みに、顕允は芳洲の長男であり、鵬海（1698～1739）は芳洲の二代目清元の雅号である。つまり顕允も鵬海も同一人物である。

先の「芳洲会」は昭和62年春、本史料を底本にして『交隣提醒・抜粋・現代語訳』を45頁の冊子にして刊行した。因みに本書は公刊されていない。本書の前書きのようなところに、次のように記されている。参考のためにそのまま列挙してみよう。

○五十四段に分かれた本文中から十五段を選び、現代語文を添えました。

○芳洲書院よりお借りした芳洲直筆全文のコピーを更に50%縮小コピーしたものを上段に置きました。

○現代語文のテキストとしたのは原文を活字になおした「雨森芳洲全集三」関西大学東西学術研究所刊行です。

○原文の語順の並び通りに読み下しましたので、当時と現在の構文の違い文章感覚のちがいもあり、すんなり読み辛いところもありますが、語順としてはこの通りです。

○全くの素人の読み下しであり、又、自分で調べうる限りの注も加えましたが、はなはだ不十分なものです。誤りも多いことでしょうが、お許しねがいます。（上西）と、ある。

次に、冗長ではあるが、次頁の「発刊にあたり」の文章から抜粋してみることにしよう。

“芳洲会が再興され、早くも三年目を迎えようとしています。恒例の研修会、総会の時期となりました。今までは、高名な先生方にご講演をお願いして、朝鮮を中心とした東アジアを舞台として活躍された芳洲先生の教育者、思想家、経世家、そして日本の第一線の外交家としての概要を啓発していただいてまいりました。勿論、当時の朝鮮の大学者でさえ、言葉を極めて感嘆した程の芳洲先生のこと、その著書たるや漢籍からの引用あり、朝鮮語の漢字表現ありで、極めて難解であります。中国でも、これ程の詳細且つ膨大な辞典はないと言われている大修館の「大漢和辞典」にさえ載っていない言葉が数多く使われています。それでは、どの著書がいいのか、比較的分かりやすくしかも今、時間をかけずに提供できるテキスト的なものはと検討した結果、幸いにして、上西氏の「抜粋、現代語訳、交隣提醒」が、格好の教材でありますので、これを複製しようということになりました。（中略）京都大学教授上田正昭先生は、「不朽

の名著」と激賞されています。既に内外からこの本のご希望もあり、とりあえず訳本を発刊することにいたしました。この訳本の発刊にあたり、上西氏のご了解を得るため、関西大学東西研究所などにも問い合わせをいたしましたが、氏名、住所とも確認できませんでした。なお、若干の訂正をさせていただきました。ここにお詫びして、お許しを得たいと思います。（中略）昭和62年春　芳洲会宮澤義夫”とある。

次に、韓国の「韓日関係史学会」から原典を現代韓国語で刊行された『訳注交隣提醒』（韓日関係史学会編、国学資料院刊、2001年２月初版発行）を見てみよう。

本書の発刊辞（韓国語文）には概ね次のように記されている。

“まず、「韓日関係史学会」が1992年に設立されたこと、本書の刊行が韓日関係史分野の基礎研究に多くの寄与をなすであろうとの期待のもとに刊行されたこと、『交隣提醒』は書体と文体がとても難解で、まだ日本でも訳注本が未刊行であること、このような状況の中で、我が研究者の数年間に亘る情熱と労苦によって訳注本が刊行されるのは実に意義深いことだと言わざるをえない”（日本語訳は筆者）と、記述されている。

一方、本書の序文（韓国語文）には概ね次のように記されている。

“今から10年前の1990年、当時、盧泰愚大統領が日本の国会で、未来志向的な韓日関係の構築を力説しながら紹介した歴史的人物は他でもない日本の近世の思想家雨森芳洲であった。日本の歴史専門家であっても、いわゆる近世日本史の専門家でなければよく知りえないほど、日本の国内でも大きな注目を浴びてこなかった彼の思想を韓国の大統領が日本の国会議員を相手に紹介したのは一大事件であった。雨森芳洲が一体誰であるかよく知らなかった新聞記者が少なかったとの後日談を見ても、当時の日本人たちがずい分当惑したことはた易く推察できることである。彼の思想が当時の日本、特に対馬島の利益を代弁する立場に身を置くのでそうなのか、最近まで雨森芳洲は韓国の史学会でさほど注目されなかった。したがって、学会はもちろん、一般の人々に広く知られていない芳洲の著作物を国内に紹介すること自体が意味のあることである。朝鮮

時代の対外関係は事大と交隣を軸としていた。ここで言う事大とは、時代によって異なろうが、だいたい明国や清国を指す。そして隣国とは、日本をはじめ女真や琉球などを指すことは言うまでもない。したがって、朝鮮時代の対日政策の基本をなしていた「交隣」の問題を解明することなく日本との外交はもとより、貿易や文化交流などを理解しえないことは明白なことである。このことがまさに我々が『交隣提醒』の原典を読み、韓国語に翻訳することとなった最も大きな理由であった。”と、同書刊行の根拠を明確にしている。

続いて、「韓日関係史学会」が1993年６月、第１回の研究会を持ち、種々の検討の結果、東京大学史料編纂所所蔵本の『交隣提醒』を底本にして毎回10名ほどの参加者のもと、毎月２・３回の原典読解研究会を重ね、1994年の６月の最後の研究会まで都合24回の『交隣提醒』の輪読会（韓国人学者13名、日本人学者１名<池内敏>）を開催したという。ところが出版には費用の問題や個人の人事に関わる隘路など、種々の痛みと悶々とした葛藤の中で発刊に至ったようである。序文の末尾には“最後に我々の多くの努力にも関わらず、解決しえない誤謬がないかと怖れる。日本人にも難解な近世古文書の書体と文体で編まれたのみならず、当時の韓日関係と関連した専門用語など、また芳洲が引用した古典文句などに対する脚注を付することが容易でないせいか、日本でも未だに『交隣提醒』の翻訳書が出版されていない状況である。我々としてもこの点を充分に考慮し、出版を巡り少なからずの悩みと葛藤を経た”と率直に述べられている。

ところで、先に言及したように、『交隣提醒』には５種の異本が存在する。先の「韓日関係史学会」刊の序文の記述によると、韓国に現存する国立中央図書館所蔵本と韓国国史編纂委員会所蔵本をも比較、検討した結果、雨森芳洲の長男である雨森鵬海が直接筆写したと思われる雨森芳洲文庫の所蔵本を底本にしたとある。

次に、筆者（呉）は、韓国国史編纂委員会所蔵本の『交隣提醒』を底本として原典の現代日本語訳に努めた。訳出の過程で、芳洲文庫所蔵本の『交隣提醒』とは内容的に見て、漢字表記、単語など、大小の相違があることが判明した。

次に、筆者が韓国国史編纂委員会所蔵本の『交隣提醒』を入手した過程を述べておきたい。それは、本務校から海外研修の資格で韓国に滞在中（1997年９月～1998年７月）、韓国南部の晋州市にある国立慶尚大学校での研究の傍ら、1998年１月23日から27日まで、韓国はソウル特別市近郊の果川市に位置する「韓国国史編纂委員会」庁舎を訪ねた。同庁舎への訪問目的は雨森芳洲に関する史料収集である。同委員会には、約３万点の「対馬島宗家文書記録」が保管されており、朝鮮後期の日韓関係史の研究にとって重要である。同庁舎にて念願の未公開史料の雨森芳洲著『交隣提醒』をマイクロフイルム撮影によって、同年１月25日に入手した喜びはひとしおであった。なお、同史料の入手に際しては、当時の李元淳委員長の特別な許可と取り計らいがあったことを特記して感謝する次第である。

ところで入手したマイクロフイルム撮影の『交隣提醒』の１頁には、「撮影指示書」とあり、1994年９月の日付で‘次ぎのごとくマイクロフイルム文書撮影を指示する’（韓国文）と国史編纂委員会資料管理室長宛の一文に始まり、撮影文書が「對馬島宗家文書」であること、使用カメラは、「富士Ｍ２」、使用フイルムは「35㎜」、撮影日時は、「1994.9」と明記され、次頁目の撮影目録には、図書名が『交隣提醒全』1728年（英祖４、享保13）17×23.5、と記載されている。

以上のことから、筆者が入手した同史料は筆者が同委員会を訪問した以前にマイクロフイルム撮影されていたこと、雨森芳洲文庫所蔵本『交隣提醒』が76張紙の楮紙、袋綴冊子装、堅張、紙綴四針眼、原表紙茶地、外題、内題とも交隣提醒、原装見返しに、雨森顕允と鵬海が並書され直筆と記録されており、体裁が25.7×19.5であるのに対して、韓国国史編纂委員会所蔵本『交隣提醒』は、雨森芳洲文庫所蔵本『交隣提醒』とは明らかに相違する。それは、韓国国史編纂委員会所蔵本『交隣提醒』は四針眼61張の縦線罫紙12行の袋綴冊子装であること、奥書には、享保十三年戊申十二月廿日雨森東五郎撰、と記録され、各袋綴中央の下段には「菰涯堂」の三字が確認できることである。したがって、同所蔵本は、当時、「菰涯堂」なるところで作成された用紙を用いて記録されたことが分る。また、本書の最後の部分には、「交隣提醒」に続き「朝鮮風俗之

事」（七張半）と「武器之事」（一張）と記載されて『交隣提醒』が終結するところから、記述の「雨森芳洲文庫所蔵本」、「中央公民館所蔵本」、および「韓国国立中央博物館所蔵本」とは異同があることが分る。

『交隣提醒』の書誌に関しては、現在伝わる５種の版本の異同の究明が今後の課題となろう。

なお、本稿は引き続き、次号より“原典『交隣提醒』について”、“現代語訳『交隣提醒』”、“おわりに”と、順次論述する予定である。

〔参考資料〕

①韓国国史編纂委員会所蔵本（1728）、『交隣提醒全』
②芳洲会編集（1987）、『交隣提醒・抜粋・現代語訳』、非売品
③滋賀県教育委員会編集（1994）、『雨森芳洲関係資料調査報告書』
④泉澄一（1997）、『対馬藩藩儒雨森芳洲の基礎的研究』、関西大学出版部
⑤永留久恵（1999）、『雨森芳洲』、西日本新聞社
⑥呉　満（1997.2～2000.9）、雨森芳洲と善隣外交（1）～（40）、月刊誌『友情』（81号～121号）
⑦呉　満（2004）、『雨森芳洲――日韓のかけ橋』、新風書房
⑧韓日関係史学会編（2001）、『訳注交隣提醒』、国学資料院刊（韓国）
⑨上垣外憲一（2005）、『雨森芳洲元禄享保の国際人』、講談社学術文庫